編集・発行：滋賀大学経済経営研究所
〒522-8522　滋賀県彦根市馬場1-1-1
http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/eml/index.htm
2018年4月2日発行

企画展

初期の『パンチ』誌を飾った5人の挿絵画家たち

APRIL 2 {mon} →→→ JUNE 29 {fri}, 2018

滋賀大学彦根キャンパス総合研究棟〈士魂商才館〉1階 しがだい資料展示コーナー

初期の『パンチ』誌を飾った5人の挿絵画家たち

1830～40年代の英国では、ディケンズの挿絵入り小説の人気や、挿絵入り新聞『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』、漫画・漫文雑誌『パンチ』の刊行とともに、挿絵入り小説・ジャーナリズムの一大隆盛期が始まる。

書物が一部の限られた人々だけのものであった時代から、書物（読書体験）の大衆化の時代へ。広範な読者層に支えられた挿絵入り出版物の人気は、イメージの時代の到来を告げるすぐれて近代的な現象の一つであった。

この企画展では、挿絵画家のうち、J. リーチ、R. ドイル、Ch. キーン、J. テニエル、G. デュ・モーリエの5人を取り上げる。

挿絵入り出版ジャーナリズムの勃興期から隆盛期にかけて活躍した厖(ぼう)大な画家たちのなかから、『パンチ』誌で活躍し人気を博したこの5人は、いかなる挿絵を描いたのか、その一部分をこの企画展では紹介する。

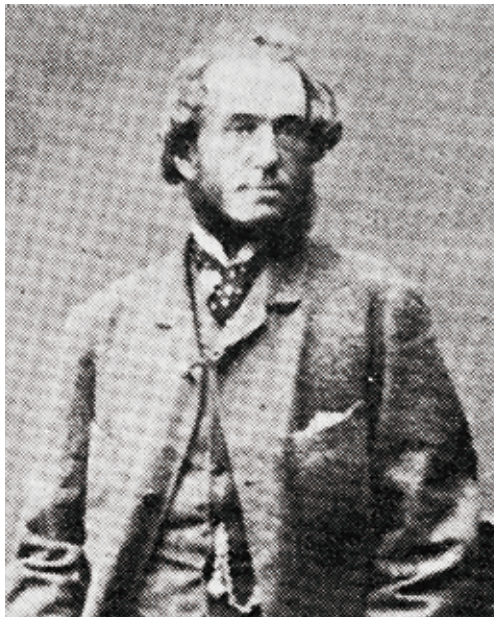
2018年4月

監修　谷田 博幸（タニタ ヒロユキ）
滋賀大学教授（美術理論・美術史）

関係図書

『ヴィクトリア朝挿絵画家列伝 ―ディケンズと『パンチ』誌の周辺』（図書出版社）1993
『ロセッティ ―ラファエル前派を超えて』（平凡社）1993
『極北の迷宮 ―北極探検とヴィクトリア朝文化』（名古屋大学出版会）2000
『図説ヴィクトリア朝百貨事典』（河出書房新社）2001, 2017
『唯美主義とジャパニズム』（名古屋大学出版会）2004
『ヴィクトリア朝英国と東アジア』（思文閣出版）共著 2006、など

John Leech ジョン・リーチ



J. リーチ肖像写真

Jeremy Maas,
THE VICTORIAN ART WORLD IN PHOTOGRAPHS, 1984.

◆生没年（地）及び略歴

（1817 ロンドン－1864 ロンドン）ロンドンのラドゲイト・ヒルに 1771 年から続くコーヒー・ハウスの老舗“ロンドン・コーヒー・ハウス”に長男として生まれている。幼少の頃から絵の好きな少年だったらしく、1825 年に入学した有名なパブリック・スクール、チャーターハウスでも暇さえあればノートに漫画を描く毎日だったようだ。1831 年にチャーターハウスを退学したリーチは翌年秋から聖バーソロミュー病院で本格的に医学を学んだが、やがて家業の経営がおもわしくなくなり、とうとう 1834 年早々破産宣告を受ける羽目に陥った。医学を断念せざるを得なかったものの、結局この不幸がリーチのカリカチャリストとしての成功を早めることになった。1841 年 8 月、旧友 P. リーの紹介で『パンチ』にデビューしたが、早くも 1844 年頃からは首席カートゥニストとして主導的な役割を果たし、『パンチ』の人気を国民的なレヴェルにまで引き上げる最大の功労者となった。晩年はいささか神経を病み、気むずかしい面を見せることも多かったというが、亡くなる 1864 年 10 月まで休みなく、紳士らしい節度のある笑いを提供し続けた。この 23 年間に亙（わた）るリーチの華々しい活躍がなければ、おそらく『パンチ』も凡百の雑誌なみにいつの間にか姿を消し、到底 150 年余りに及ぶ長寿を全うすることなど覚束なかったであろう。

◆『パンチ』での活動（掲載）期間　1841-64 年

◆掲載点数　約 3,000 点（720 点余りのカートゥーンを含む）

◆掲載作品のスタイル・主題上の特徴・傾向など

「初期ヴィクトリア朝社会のインデックス」と言われるように、リーチのカリカチュアは刻々と変化する世相、風俗、流行のあらゆる局面をわれわれに見せてくれている。しかし、おそらくリーチ自身が個人的に最も好んだテーマは、狩猟や乗馬や釣りなどスポーティング・テーマであったと思われる。

◆『パンチ』誌デビューの時日、及び代表的作品・シリーズなど

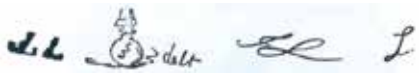
（初出）1841 年 8 月 7 日号。リーチはそもそもの初めから、一頁大のカートゥーンでデビューを飾っている。しかし当時はまだ「カートゥーン」という名称は用いられず、「パンチの鉛筆法（ペンシリング）」と呼ばれていた。そして 1843 年 7 月 15 日号掲載の「実体と影」が記念すべきカートゥーン第 1 号となり、以後本来「下絵」を意味するカートゥーンという言葉を「一齣（こま）漫画」の意で用いることが一般化していった。代表的なシリーズとしては、D. ジェロルドの「コードル夫人の寝間の小言」（1845）、「家庭の幸福」（1847-48）、「家事の楽しみ」（1849）、「女中」（1853 - 63）、「従僕」（1854 - 63）などがある。このうち、ジェロルドの「コードル夫人の寝間の小言」は 1846 年に単行本にまとめられ、憎めない俗物の家長ブリッグズ氏が奮闘する「家事の楽しみ」シリーズ他も、『ブリッグズ氏行状記』（1860）として刊行されている。

◆『パンチ』誌以外での活動・仕事など

代表的な本の挿絵の仕事としては、R.H. バラム師の『インゴルズビィ物語』（1840）、ギルバート・ア＝ベケットの『滑稽英国史』（2 巻 ,1847-48）、R.S. サーティーズの『スポンジ氏のスポーティング・ツアー』（1853）などがあり、C. ディケンズの『クリスマス・キャロル』（1843）以下 5 冊のクリスマス・ブックにも 28 点の挿絵を寄せている。また『パンチ』掲載作品のアンソロジーとして『J. リーチの生活・人物画集』（5 巻 ,1854-58, 1860; 再刊 3 巻 , 1886-87）がある。

The London Magazine(1840), *Bentley's Miscellany* (1840-49), *Hood's Comic Annual*(1844-46), *ILN*(1845-57), *Once a Week*(1859-64), 他多数

◆サイン、モノグラム



◆参考文献

F.G.Kitton, *J.Leech, Artist and Humorist,* London, 1883; W.P.Frith, *J.Leech, His Life and Work,* 2 vols., London, 1891; W.B.O.Field, *J.Leech on My Shelves*, London, 1930; The Rev. G. Tidy, *A Little about Leech*, London, 1931; J.Rose, *The Drawings of J.Leech*, London, 1950; S.Houfe, *J.Leech and the Victorian Scene*, Woodbridge, Suffork, 1984.

谷田博幸「挿絵画家辞典」『ヴィクトリアン・パンチ：図像資料で読む 19 世紀世界』7 解説・資料編 , 柏書房 , 1996.

Richard Doyle リチャード・ドイル

R. ドイル肖像写真

Jeremy Maas,
THE VICTORIAN ART WORLD IN PHOTOGRAPHS, 1984.

◆生没年（地）及び略歴

（1824 ロンドン－1883 ロンドン）ジョン・ドイルの次男としてロンドンに生まれ、早くも 15 歳の若さでカリカチャリストとしてデビューを果たしている。『パンチ』へのデビューも思いの外早く、1843 年 12 月 16 日号に有名な T. フッドの「シャツの唄」の装飾ボーダー・カットを描いたときは 20 歳にもなっていなかった。当初は小さなイニシャル・カットが多かったが、豊かな装飾性とファンタスティックなイマジネーションを兼ね備えたかれのカットは次第に人気を集め、1844 年 3 月には早くもカートゥーンを任されている。やがて J. リーチとカートゥーンを分担するまでになるが、かれの人気を不動のものにしたのは、1849-50 年に連載された「英国人の風俗と習慣」のシリーズと 1850 年連載の「ブラウンとジョーンズとロビンスン」のシリーズであった。しかし、1850 年 11 月熱心なカソリック信者であったドイルは『パンチ』の展開する反カソリック・キャンペーンに反発し、止むなく同誌を去ることになった。『パンチ』との蜜月時代はわずか 7 年足らずで終焉を迎えたが、今一つ忘れてならないことは、かれの手がけた第 6 巻（1844 年 1-6 月）の表紙デザインが、第 16 巻（1849 年 1-6 月）で少々手直しされたのみで、以後 1954 年までおよそ 110 年もの間、『パンチ』の顔として親しまれ続けたことである。『パンチ』以後の仕事で特筆すべきものとしては、1861-62 年に『コーンヒル・マガジン』誌に連載されて人気を博した「英国社会の鳥瞰図」シリーズと W. アリンガムの詩集『妖精の国にて』（1870）に寄せた 36 点の挿絵が挙げられるだろう。晩年は水彩による妖精画の制作に没頭し、1878 年から亡くなる 1883 年まで毎年グローヴナー・ギャラリー展に出品し続けている。

◆『パンチ』での活動（掲載）期間　1843-50 年、1853-54 年、1857 年、1862 年、1864 年

◆掲載点数　1,028 点（93 点のカートゥーンを含む）

◆掲載作品のスタイル・主題上の特徴・傾向など

愉快な装飾的イニシャル・カットから政治、社会風俗、スポーティング・テーマ、演劇、美術等とレパートリーは多岐に亙（わた）り、テーマによって描画のスタイルも実に多彩に使い分けている。

◆『パンチ』誌デビューの時日、及び代表的作品・シリーズなど

（初出）1843 年 12 月 16 日号。代表的シリーズとして、“切り抜きフレスコ・スタイル”と自ら呼んだ輪郭線のみの平板な中世風スタイルで描かれた「英国人の風俗と習慣」（1849 年 3-12 月、1850 年 2-6 月）と「ブラウンとジョーンズとロビンスン」（1850 年 7-11 月）がある。いずれのシリーズも、1849 年と 1854 年にブラッドベリー＆エヴァンズから単行本として出版されている。

◆『パンチ』誌以外での活動・仕事など

代表的な本の挿絵の仕事として、C. ディケンズの『鐘の音』(1845)以下のクリスマス・ブック 3 冊、J. ラスキンの童話『黄金の河の王』（1851）、W.M. サッカリーの『ニューカム家の人々』（1854-55）、W. アリンガムの『妖精の国にて』（1870）がある。また 1840 年につけられた愉快な手書（描）きの日記が、1885 年に『ディッキー・ドイルの日記』として刊行されている。

ILN（1851）、*The Cornhill Magazine*（1861-62）、*The Pall Mall Gazette*（1885-87）、他

◆サイン、モノグラム

◆参考文献

D.Hambourg, *R.Doyle : His Life and Work*, London, 1948 ; R.Engen, R.Doyle, Stroud, Glos., 1983 ; *R.Doyle and His Family*(exh.cat.), V.&A.Museum, London, 1984.

谷田博幸「挿絵画家辞典」『ヴィクトリアン・パンチ : 図像資料で読む 19 世紀世界』7 解説・資料編 , 柏書房 , 1996.

Charles Keene チャールズ・キーン

Ch. キーン肖像写真

Jeremy Maas,
THE VICTORIAN ART WORLD IN PHOTOGRAPHS, 1984.

◆生没年（地）及び略歴

（1823 ロンドン－1891 ロンドン）ロンドンに弁護士の息子として生まれ、父が亡くなる 1838 年までサフォーク州イプスウィッチですごしている。当初、弁護士や建築家を志したが結局性に合わず、やがて彫版師 J.W. ウィンパーの下で木口木版の技術を修得し、1852 年ストランドで独立した。『パンチ』へはちょうどその頃から、スタッフの一人H. シルヴァーの紹介で作品を寄せ始めている。正式のスタッフとしていわゆる“マホガニー・テーブル”に招かれたのは、1860 年 2 月 20 日のことで、以後亡くなる 1891 年まで『パンチ』を代表するカリカチャリストとして活躍した。都市に生きる人々の生態をありのままに写し続けたかれは、時にホガーズ以来最も偉大なリアリストとして讃えられ、その勢いのあるペン・ハッチングのスタイルは以後多くのエピゴーネンを輩出した。J. リーチですら、1860 年前後キーンの力強いハッチングの描法に少なからず影響を受けているほどである。また数こそ少ないが、かれはエッチングの仕事も残しており、近年ホイッスラーと並ぶエッチャーとして評価は高い。

◆『パンチ』での活動（掲載）期間　1851-90 年

◆掲載点数　約 3,000 点（14 点のカートゥーンを含む）

◆掲載作品のスタイル・主題上の特徴・傾向など

筆勢の強いハッチングを巧みに駆使したリアリスティックな描写で、一貫して都市生活者の日常を追い続けた。また馭者（ぎょしゃ）など街頭で生活する人々の姿を描いて、かれほど真実な生活感を伝えられたアーティストは他にいなかった。

◆『パンチ』誌デビューの時日、及び代表的作品・シリーズなど

（初出）1851 年 12 月 20 日号。特にこれといった代表作があるわけではないが、例えば 1959 年 3 月 12 日号の「季節の御挨拶」などは、初期の精緻刻銘（せいちこくめい）なスタイルを最もよく伝える好例であろうし、1864 年 11 月 5 日号の「叱責」や 1878 年 6 月 22 日号の「レンブラント効果」などは、素早く適確なハッチングによって見事に質感や陰影を描写し切った、キーンならではの典型的作例と言ってよいだろう。

◆『パンチ』誌以外での活動・仕事など

かれは生涯に本の挿絵の仕事を 63 冊余り手がけているが、中でも W.H. ダルケンの『ドイツ詩集』(1856)、D. ジェロルドの『コードル夫人の寝間の小言』(1866)、C. リードの『廻廊と炉端』（1890）などが傑作として名高い。また『パンチ』掲載作品のアンソロジーとして『Ch. キーンによってスケッチされたわが国民』（1881）があり、没後の 1903 年には、オリジナル・プレイトをもとに刷られた 21 点からなる『Ch. キーン , エッチング集』が出版されている。

ILN(1850-56),*Once a Week*(1859-65,1867), *Good Words*(1862),*The Cornhill Magazine*(1864), 他

◆サイン、モノグラム

◆参考文献

G.S.Layard, *The Life and Letters of C.Keene*, London, 1892; G.S.Layard, *The Work of C.Keene*, London, 1897; L.Lindsay,*C.Keene, the Artist's Artist*, London,1934; D.Hudson, *C.Keene*, London,1947; *C.Keene-The Artist's Artist, 1823-1891*(exh.cat.), Christie's, London, 1991.

谷田博幸「挿絵画家辞典」『ヴィクトリアン・パンチ : 図像資料で読む 19 世紀世界』7 解説・資料編 , 柏書房 , 1996.

Sir John Tenniel

ジョン・テニエル卿

J. テニエル卿肖像写真

Jeremy Maas,
THE VICTORIAN ART WORLD IN PHOTOGRAPHS, 1984.

◆生没年（地）及び略歴

（1820 ロンドン－1914 ロンドン）父はロンドンでフェンシングやボクシング、ダンスなどを教える教師であった。そもそもテニエルは、J. リーチや R. ドイルなどとは異なり、RA スクールズで正規の美術教育を受け、1939 年から RA 展に出品する有能な画家として出発している。また 1840 年、日課となっていた父とのフェンシングの練習で右眼を失明した後も、G. デュ . モーリエのように画家の夢を棄て去ることはなかった。しかし、ある意味で 1845 年のウェストミンスター宮内部装飾下絵競技展入賞で、かれは画家としての頂点を迎えることになる。T. ジェイムズ師の『新編イソップ寓話』（1848）に寄せた挿絵が、かれを油彩画家から挿絵画家・カリカチャリストへと転向させることになった。1850 年末、M. レモンは R. ドイルが抜けて生じた穴を埋めるべく、『イソップ寓話』の挿絵で目をつけていたテニエルに白羽の矢を立てたのである。当初は小さなイニシャル・カットも手がけているものの、翌 1851 年 2 月には早くも一頁大のカートゥーンを担当し、J. リーチが神経を病んで衰弱を見せ始めた 1861 年からは、押しも押されもせぬ『パンチ』の首席カートゥニストとして活躍した。その後、1901 年 1 月ヴィクトリア女王の崩御とともに引退するまで、40 年の長きに亙（わた）って、かれは政治諷刺に辣腕を揮い続けた。今日、L. キャロルの『不思議の国のアリス』（1865）の挿絵画家してのみクローズ・アップされることが多いが、正しくテニエルはヴィクトリア朝が生んだ最大の政治諷刺カリカチャリストであった。1893 年長年の功績を讃えるべく、W. グラッドストーンの尽力でかれに勲爵士（ナイト）の称号が授けられている。また 1914 年の死に際しては、『パンチ』もかつて例のないテニエル追悼号（3 月 4 日号）を刊行した。

◆『パンチ』での活動（掲載）期間　1850-1901 年

◆掲載点数　約 3,300 点（2,287 点のカートゥーンを含む）

◆掲載作品のスタイル・主題上の特徴・傾向など

かれのスタイルは、アカデミックな美術教育をしのばせる人物の古典的なポーズや、ハード・エッジな輪郭、無駄のない線描でマッシヴにとらえられた人物描写などに特徴がある。また 1860 年代以降は比較的真面目な政治諷刺が中心となるものの、結局かれは 1850 年代のイニシャル・カットや小カットで見せたコミカルな天稟を最後まで喪うことはなかった。しかしさすがのテニエルも、残された左眼の不調や迫り来る老いには克てず、1890 年代後半のカートゥーンにはいささか疲れの色が見えている。

◆『パンチ』誌デビューの時日、及び代表的作品・シリーズなど

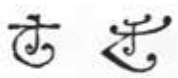
（初出）1850 年 11 月 30 日号。初期の人気シリーズとして、「パンチのシェイクスピア画集」（1855-56、40 回連載）や「パンチの英国衣装の書」（1860、42 回連載）などがある。しかし、かれの真骨頂は 2287 点にのぼるカートゥーンにあったことは言うまでもない。英国の擬人像としてお馴染みのジョン・ブル氏や女神ブリタニア、あるいはブリティッシュ・ライオンのイメージは、テニエルによって初めて広く人口に膾炙（かいしゃ）したと言っても過言ではないだろう。

◆『パンチ』誌以外での活動・仕事など

代表的な本の挿絵の仕事に、T. ジェイムズ師の『新編イソップ寓話』（1848）や S. ブルックスの『ゴルディオス王の結び目』（1860）、L. キャロルの『不思議の国のアリス』（1865）、『鏡の国のアリス』（1872）などがある。

ILN(1857,1868), *Once a Week*(1859-67), *Good Words*(1862-64), 他

◆サイン、モノグラム



◆参考文献

C. Monkhouse, *The Life and Works of Sir John Tenniel, R.I.*, London, 1901; F. Sarazano, *Sir John Tenniel*, London,1948; M. Hancher, *The Tenniel Illustrations to the 'Alice' Books*, Columbus, Ohio, 1985; F. Morris, *J. Tenniel, Cartoonist : A Critical & Sociocultural Study in the Art of the Victorian Political Cartoon*, Ann Arbor, Michigan, 1985；R. Engen, *Sir John Tenniel : Alice' s White Knight*, Aldershot, Hants., 1991.

谷田博幸「挿絵画家辞典」『ヴィクトリアン・パンチ : 図像資料で読む 19 世紀世界』7 解説・資料編 , 柏書房 , 1996.

George Du Maurier

ジョージ・デュ・モーリエ

G. デュ・モーリエ肖像写真

Jeremy Maas,
THE VICTORIAN ART WORLD IN PHOTOGRAPHS, 1984.

◆生没年（地）及び略歴

（1834 パリ－1896 ハムステッド）パリに生まれ、当初ユニヴァシティ・カレッジで化学を学ぶためロンドンに渡ったが、1856 年再びパリに戻って、C. グレイルのアトリエで絵を学び始めた。このとき同じアトリエに学ぶT. アームストロングやJ.M. ホイッスラーを識った。翌 1857 年、さらにアントワープのアカデミーに学んだが、間もなく左眼の失明という思いがけない奇禍に見舞われ、画家となる夢を断念せざるを得なくなった。失意の底にあったデュ・モーリエに一筋の光明を与えてくれたのが 1859 年版パンチ・アルマナックの一冊であったという。かれは絵筆を鉛筆に持ちかえて、イラストレーターとしての道に活路を見出したのだった。1860 年 5 月旧友ホイッスラーを頼ってロンドンに渡り、挿絵テクニックの研鑽に専念した。『パンチ』へのデビューはその年の 10 月と意外に早かったが、J. リーチ、J. テニエル、Ch. キーンという強力な挿絵スタッフの陣容がかれの割り込む余地を与えなかった。かれが正式のスタッフとして招かれたのは、J. リーチ没後の 1864 年 11 月のことであった。こうして以後 25 年余り続くことになる、“政界のテニエルと中産階級のキーンと社交界のデュ･モーリエ” による『パンチ』第二の黄金時代が築かれることになった。『パンチ』にとってデュ・モーリエの登場は、ある意味で新しい時代の幕開けを物語るものであった。いわゆる“1860 年代の挿絵（シクスティーズ）”の中で育まれたかれのスタイルは、それまでのもっぱら滑稽味が先行する『パンチ』に芸術的感覚をもたらしたのである。

◆『パンチ』での活動（掲載）期間　1860-96 年

◆掲載点数　3,520 点（87 点のカートゥーンを含む）

◆掲載作品のスタイル・主題上の特徴・傾向など

社交界のファッショナブルな風俗や家庭的情景を扱った作品が大半を占める。とりわけ女性の描写に見られる細かな美しさは、他の追随を許さないものであり、デュ・モーリエ・タイプとでも呼ぶべき女性美の一典型を作り上げている。また時に動物やファッションをモティーフにして驚くべき奇想をはばたかせることがあり、そうした際にかれの描線のもつ一種独特の力強いうねりが遺憾なく発揮されることになっている。

◆『パンチ』誌デビューの時日、及び代表的作品・シリーズなど

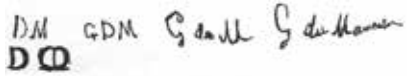
（初出）1860 年 10 月 6 日号。代表的なシリーズとしては、1866 年 3 月に 5 回連載された「キャメロットの伝説」が魅力的な挿絵と戯詩によってロセッティー派の中世趣味に対する見事な諷刺となっている。しかし、デュ・モーリエの『パンチ』におけるハイライトは、やはり“唯美主義的熱狂（エステティック・クレイス）”を皮肉った一連のカリカチュアであろう。チャイナ・マニアや唯美主義かぶれの青年を扱ったカリカチュアは 1870 年代半ばから散発的に現れていたが、1880 年前後、チマーブエ・ブラウン夫人、詩人ポスルスウェイト、画家モードルという強力なキャラクターを得て頂点に達し、圧倒的な人気を獲得した。

◆『パンチ』誌以外での活動・仕事など

本の挿絵の仕事も多数手がけており、代表的なものに、『クランフォード』（1864）を初めとするギャスケル夫人の小説 9 篇、D.W. ジェロルドの『羽根飾りの物語』(1867)、サッカリーの『ヘンリー・エズモンド』（1868）などがある。また 1890 年代に発表した『トリルビィ』（1895）など 3 篇の小説にも自ら挿絵を入れている。さらに、『パンチ』に掲載されたカリカチュアや漫文･戯詩の数々は、後に『普段着の英国社交界』（1880）、『社交界画集（ソサイエティ・ピクチャーズ）』（1893）、『キャメロットの伝説』（1898）などにまとめられている他、J. リーチや Ch. キーンを論じた『社会諷刺画』（1898）も没後に出版されている。

Once a Week(1860-68), *Good Words*(1861), *London Society*(1862-68), *The Cornhill Magazine* (1864,1870,1875-80), *The Graphic*(1871,1888), *Harper's Magazin*(1889-94), 他

◆サイン、モノグラム



◆参考文献

T.M.Wood,*G.Du Maurier:Satirist of the Victorians*,London,1913;D.P.Whiteley,*G.Du Maurier:His Life and Work*,London,1948; L.Ormond,*G.Du Maurier*,London,1969.

谷田博幸「挿絵画家辞典」『ヴィクトリアン・パンチ：図像資料で読む 19 世紀世界』7 解説・資料編，柏書房，1996.

ジョン・リーチ

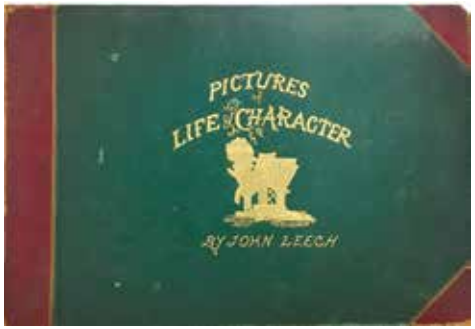
John Leech

1817—1864

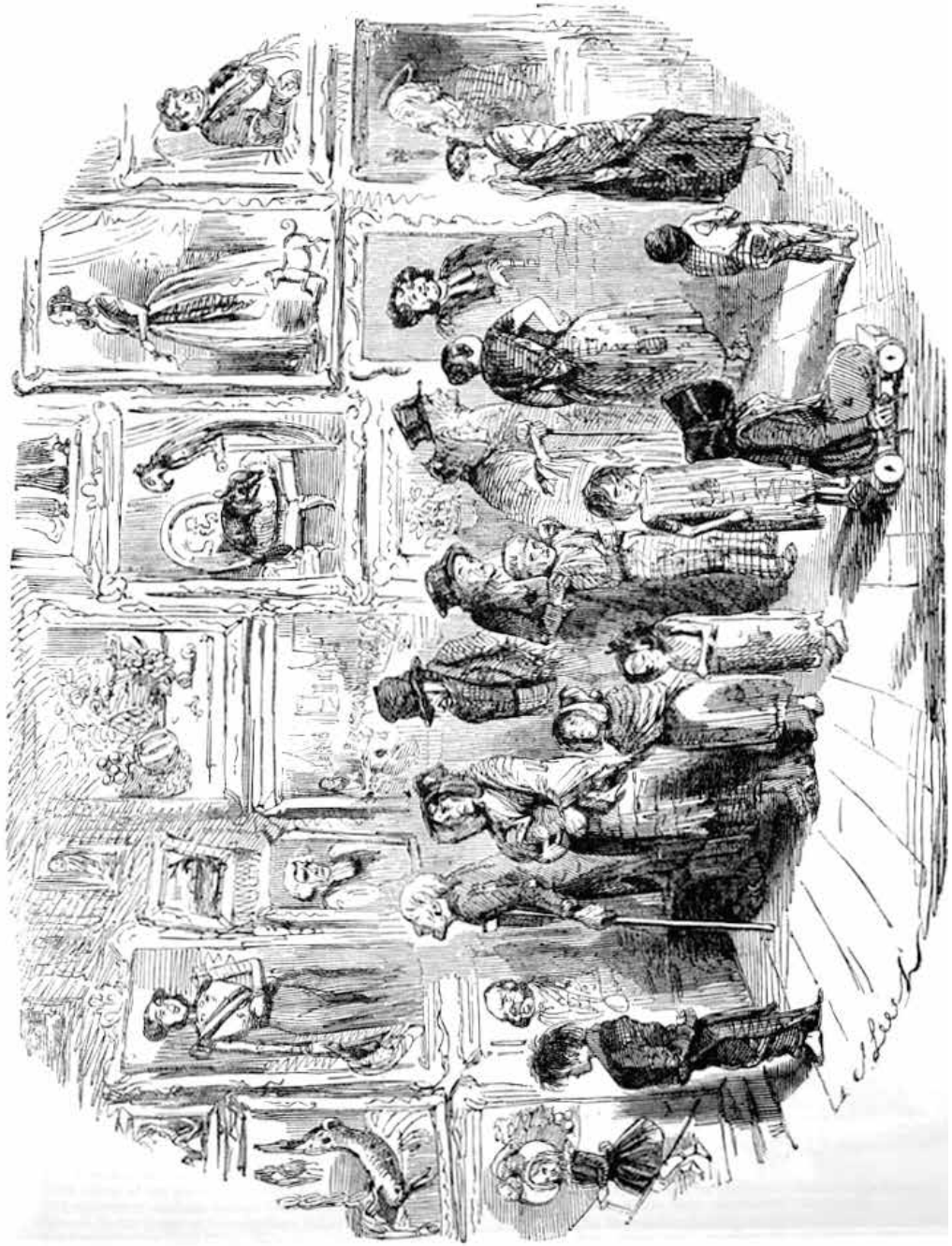
ロンドンのワイン商の息子として生まれる。幼い頃から画才を発揮したが、初めは医学を志した。小説家サッカレーの勧めで画家の道に進む決意を固め、1835 年ロンドン子の生態を諷刺した処女作『エッチングとスケッチ』を発表した。1841 年に創刊された『パンチ』誌には、1864 年亡くなるまでの間におよそ 3,000 点の挿絵を寄せている。ディケンズの『クリスマス・キャロル』(1843 - 44) をはじめとする一連のクリスマス・ブックの挿絵も手がけているが、ディケンズはかれの絵を「徹頭徹尾、ジェントルマンの絵である」と評した。

『物語る絵 19 世紀の挿絵本 Narrative Image-Book Illustration in 19th Century』栃木県立美術館・町田市立国際版画美術館 1989.

The Comic History of England
『滑稽英国史』
Gilbert A . A' Beckett
(illustrated by J.Leech.)
London: Bradbury, Evans, & Co., 1847.



Pictures of Life and Character by John Leech
『ジョン・リーチの生活・人物画集』
London: Bradbury, Evans, & Co., 1887.



SUBSTANCE AND SHADOW. (『パンチ』1843 年 7 月 13 日号)

リチャード・ドイル

Richard Doyle

1824—1883

ロンドンに諷刺画家ジョン・ドイルの息子として生まれる。幼い頃から絵に親しみ、1840 年には既に『エグリントン騎馬試合』を公刊している。1843 年『パンチ』誌に紹介され、まもなく定期的に挿絵を寄せることになった。しかし 1850 年『パンチ』誌がローマ教皇を攻撃したため、熱心なカソリック信者であったかれは、同誌から身をひいた。かれは、サッカレーやディケンズ、ラスキンなどの作品にも挿絵を制作したが、W. アリンガムの『妖精の国にて』(1870) は、エドマンド・エヴァンズによる色刷木口木版の美しい、代表作である。因みに『ショーロック・ホームズ』でなじみ深いコナン・ドイルはかれの甥にあたる。

『物語る絵 19 世紀の挿絵本 Narrative Image-Book Illustration in 19th Century』栃木県立美術館・町田市立国際版画美術館 1989.

A Journal kept by Richard Doyle in the year 1840
『リチャード・ドイルの 1840 年の絵日記』
London: Smith, Elder, & Co., 1885.

Punch
『パンチ』合冊本
Vol.57 (July 10, 1869 ～ Jan.1, 1870)
Vol.63 (July 6, 1872 ～ Dec.28, 1872)

THE GREAT SEA SERPENT.（『パンチ・アルマナック』1849 年）

チャールズ・キーン

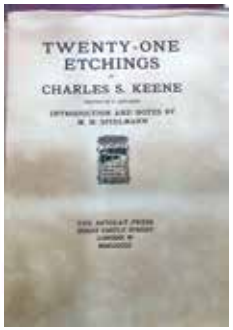
Charles Keene

1823—1891

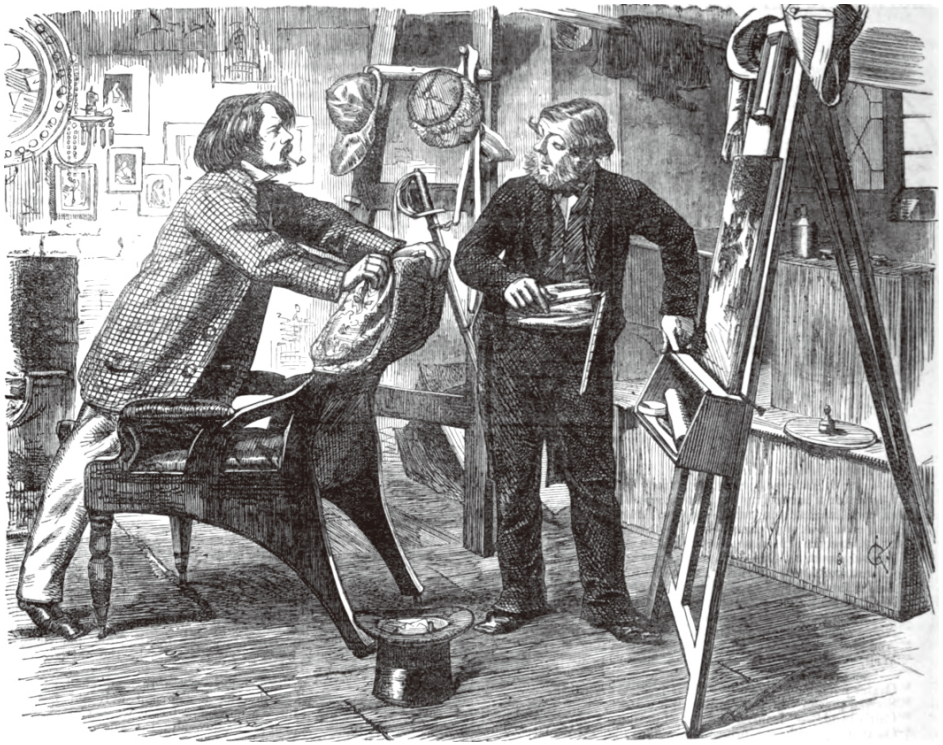
ロンドンに弁護士の息子として生まれ、1838 年までサフォーク州イプスウィッチですごす。当初、弁護士や建築家を志したが、C. ウィンパーの下で木口木版の修業を積んだ後、挿絵の道に進んだ。1852 年から『パンチ』誌の挿絵を手がけ、これは生涯つづいた。かれの挿絵は、簡略化された柔らかい線描で市井の人々の生活を扱ったものが多い。種々の雑誌・アンソロジーの他、主要な挿絵としては、W.H. ダルケンの『ドイツ詩集』(1856)、D. ジェロルドの『コードル夫人の寝間の小言』(1866)、C. リードの『廻廊と炉端』(1890) などがある。

『物語る絵 19 世紀の挿絵本 Narrative Image-Book Illustration in 19th Century』栃木県立美術館・町田市立国際版画美術館 1989.

Douglas Jerrold
Mrs.Caudle's Curtain Lectures
『コードル夫人の寝間の小言』
(illustrated by C.Keene)
London: Bradbury, Evans, & Co., 1866.



Twenty-one Etchings by Charles.S.Keene
『Ch. キーンによる 21 枚のエッチング』
(introduction & Notes by M.H.Spielmann)
Limited edishion No.49/150



THE COMPLIMENTS OF THE SEASON.(『パンチ』1859 年 3 月 12 日号)

SEASONABLE.(『パンチ』1872 年 9 月 28 日号)

ジョン・テニエル卿

Sir John Tenniel

1820－1914

ロンドンに生まれる。ロイヤル・アカデミー・スクールに学び、1840 年代動物素描で頭角を現し始めた。1848 年に発表した『イソップ寓話』が『パンチ』誌のマーク・レモンの注意を惹き、1851 年から 50 年に亙(わた)って『パンチ』誌のスタッフを務めた。しかし、かれの名は、つねにルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』（1865）と『鏡の国のアリス』（1872）の愉快な挿絵とともに記憶されている。1893 年には、ナイトの爵位を受けている。

『物語る絵 19 世紀の挿絵本 Narrative Image-Book Illustration in 19th Century』栃木県立美術館・町田市立国際版画美術館 1989.

Cartoons from Punch, by John Tenniel
『ジョン・テニエルによるパンチの風刺漫画集』
London: Bradbury, Evans, & Co., 1878.

Benjamin Disraeli, in Upwards of 100 Cartoons from the Collection of Mr.Punch
『ベンジャミン・ディスレーリ　パンチの風刺漫画 100 選』
※ベンジャミン・ディスレーリは英国ヴィクトリア朝の政党政治を代表する人物
London: Bradbury, Agnew, & Co., 1878.

JEDDO AND BELFAST ; OR, A PUZZLE FOR JAPAN.（『パンチ』1872 年 8 月 31 日号）

THE REAL CAP OF LIBERTY.
（『パンチ』1871 年 12 月 30 日号）

PITY THE POOR GAROTTERS !
（『パンチ』1872 年 10 月 26 日号）

ジョージ・デュ・モーリエ

George Du Maurier

1834—1896

パリに生まれる。当初ユニヴァシティ・カレッジで化学を勉強するためロンドンに渡ったものの、1856 年再びパリに戻り、グレイルのアトリエで絵を学び始める。このときホイッスラーの知己を得る。その後、アントワープで絵画修業を続けるが、視力の低下のため断念し、ロンドンで挿絵に専念することになる。1860 年頃から定期的に『パンチ』誌に挿絵を寄せ、1866 年 3 月には有名なラファエル前派のパロディ「キャメロットの伝説」を掲載した。またギャスケル夫人の一連の小説やサッカレーの『ヘンリー・エズモンド』(1863) などの挿絵も手がけている。晩年は小説家としても名をあげ、『トリルビィ』(1894) などで自ら挿絵をつけている。

『物語る絵 19 世紀の挿絵本 Narrative Image-Book Illustration in 19th Century』栃木県立美術館・町田市立国際版画美術館 1989.

English Society at Home
『普段着の英国社交界』
London: Bradbury, Evans, & Co., 1880.

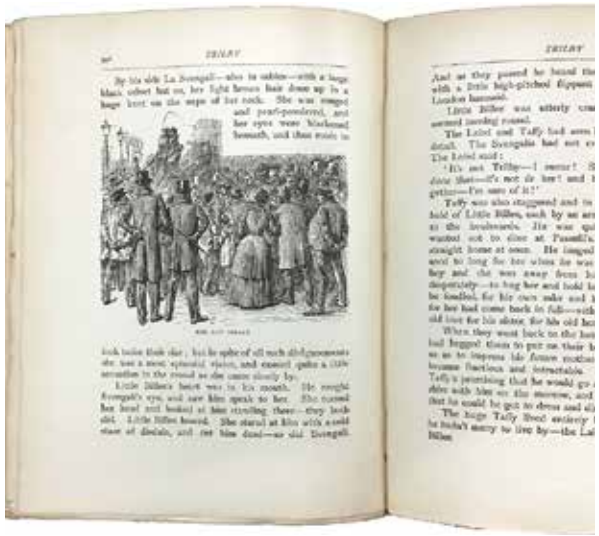
Harper's New Monthly Magazine
『ハーパーズ・ニュー・マンスリー・マガジン』誌
※初出誌から「トリルビィ」掲載号を合本にしたもの
Vol.88-89, No.524-531 (Jan.-Aug. 1894)

A LITTLE CHRISTMAS DREAM.
(『パンチ』1868 年 12 月 26 日号)

FAITH.(『パンチ』1872 年 7 月 27 日号)

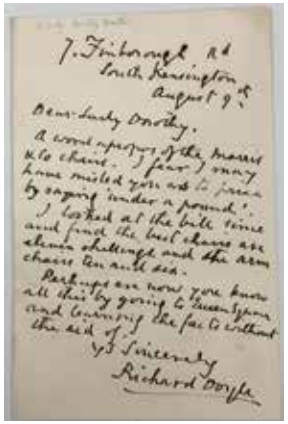
YOUNG HEADS UPON OLD SHOULDERS. (『パンチ』1872 年 7 月 27 日号)

George Du Maurier
挿絵（『トリルビィ』初版、340 頁）のための鉛筆スケッチ
1894 年
※右写真の挿絵、左端の人物



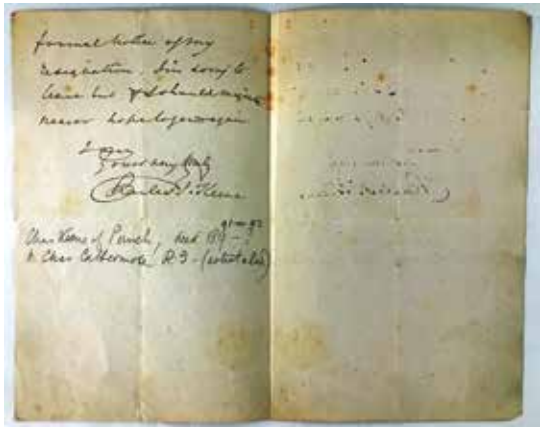
George Du Maurier
Trilby
『トリルビィ』
London: Osgood, McIlvaine, & Co., 1895.

R. ドイルのペンによるスケッチ 3 点
（いずれも R.Engen 旧蔵の R. ドイルのスクラップブックより）
※R.Engen は 19 世紀英国挿絵の研究家



R. ドイルのドロシー・ネヴィル宛書簡
年代不詳（1870 年代後半）

絵　Richard Doyle
詩　William Allingham
『妖精の国で』
筑摩書房、1988 年
※この作品は、*In Fairy Land*（London: Longmans, Green, Reader, & Dyer.,1870）の初訳である。



Ch. キーンの C. カッターモール宛書簡、年代不詳

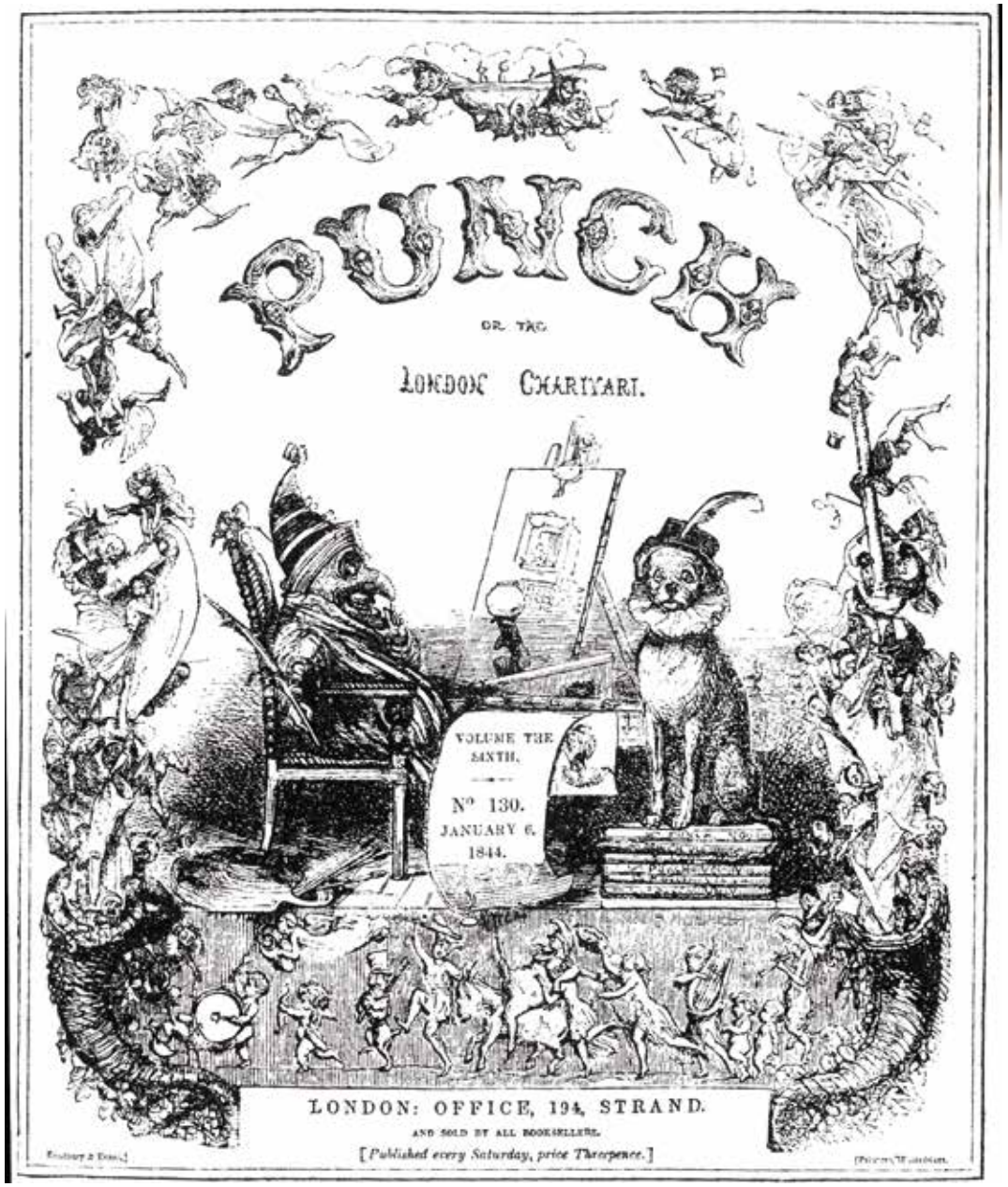
諷刺漫画雑誌『パンチ』誌 1841年－1992年

Punch, or the London Charivari. 1841-1992

1832 年にパリで創刊された漫画雑誌『シャリヴァリ』誌がドーミエやカヴァルニなどの活躍により、好評を博していることは、早くから英国でも知られていた。しかし英国でそれに互（ご）するほどの漫画雑誌を出版しようという動きは、1841 年まで現れなかった。印刷業者 J. ラスト、彫版師 E. ランデルスそしてジャーナリストの H. メイヒューが、『パンチあるいはロンドン・シャリヴァリ』と、あまりパンチのない二番煎じめいた題名の漫画雑誌を創刊したのが 1841 年 7 月 17 日のことであった。これがやがて雑誌に挿絵が入ることを通例化した英国最初の雑誌と呼ばれるほどの国民的な雑誌に成長する。

1841 年、印刷発行がブラッドリー＆エヴァンズの手に渡り、編集長にマーク・レモンが迎えられることによって、『パンチ』誌は本格的に軌道に乗り始めた。かれはサッカレーやジェロルドなどの人気作家や、同誌の看板画家として J. リーチを招いた。翌年には、R. ドイルが、また 1851 年には Ch. キーンと J. テニエルとがスタッフに加わり、『パンチ』誌の黄金時代が築かれていった。

その後も『パンチ』誌は幾多の優れた挿絵画家を輩出した。C.H. ベネット、E. グリゼ、G. デュ・モーリエ、フィル・メイ、リンリー・サンボーンなどいずれも忘れ難い画家たちである。



（『パンチ』第 6 巻 1844 年 1 月 6 日号　表紙デザイン : R. ドイル）